

馬場を侵略するチェーン店

早大生のアジト、高田馬場。この地名からどんな街並みが想像できるだろうか。いくつも軒を連ねる古書店、奇抜さを競い早大生の胃袋と味覚を攻撃するワセメシ、派手なネオンの瞬く交み屋の数々…。独自の発達を遂げてきた店ばかりかと思えば実はそんなこともない。ジンの町にもありそうなチェーン店が馬場を侵略しつつある現状に気が付きたらうか。早大生がよく利用する飲食店も実はチェーン店が多いし、ブックオフやジーンズメイトなどといった店も馬場にすっかり根付いている。そして去る7月15日、ロータリーすぐ近くのFビル1階にディスカウントショップ大手、**ドン・キホーテ**（以下ドンキ）が上陸した。早稲田通りには既にドンキの姉妹店・ピカヤがあるのだからこれぞ2軒目となる。それほどドンキは馬場と相性が良いのだろうか。馬場を侵略するチェーン店の一例としてドンキ高田馬場店に潜入した。

10月某日。昼食時ということもあってか店内の人の入りはそこそこだった。内装はどこのドンキとも寸分違わぬ雑多なレイアウト。商品の数が多い、陳列も適当だから見て回るときには十分注意する必要はあるものの、確かにこの商品の豊富さは十分に早大生の欲求を満たせるであろう。特に化粧品コーナーが大きなほうぞワセメシたちにくけるかもしれない。ちなみにレジ近くで売っていた弁当は容器の割に内容量がかなり少なく、肉は脂、こくて野菜は殆ど入っていない、というなかなか残念なものであったが、油たっぷりワセメシよりは幾分マシであったと思える。

ドンキは馬場を頻繁に訪れる早大生にもウケが良さそうだということが分かった。しかしチェーン店が馬場にびびってしまえば、学生街として独自に発達してきた馬場の風景も、日本

全国どこにでもある見慣れた看板や建物により変わってしまうかもしれない。そんな事態になる前に、何故チェーン店は馬場を選ぶのか考えてみた。

馬場は古くから学生の街、ひいては早大生の街として発展してきた。店側としては主な客層は学生であることからその懐具合も熟知しており、学生に優しいサービスを提供してきた（学生証提示で割引など）。学生としてもそれはもちろん喜ばしいことなので、自分のち気に入りの店、馴染みの店をつくる。しかし、生まれも育ちも馬場だという早大生は殆どいないだろう。大抵の者には、それが都会であれ田舎であれ自分が育った場所というのがある。そんな街にあった店が馬場に誕生したら、懐しくてつい立ち寄ってしまうのが人の性だろう。馬場を侵略しつつあるチェーン店の数々は、授業や就活に忙殺され安息の地を求める早大生の心理を汲んでいるのかもしれない。またチェーン店には営業時間の長いものも多く（先述したドンキやジーンズメイトは24時間営業を掲げている）、これも生活が不規則になりがちな学生にとって嬉しいポイントになりうるだろう。個人営業の店が営業時間を長くするのは難しいから規模の大きなチェーン店の特長であると言える。

しかし、だからと言って馬場の街並みが見えなくなる看板とロゴマークに染められてしまうのも寂しくないだろうか。もしそうなってしまったら馬場は学生の街から、学生の多い、どこにもある郊外都市へと変わってしまう。あの古びけた店舗が姿を消し、小綺麗な建物が肩を並べるようになるのは物悲しい。現代の学生生活にマッチしたチェーン店の有り難みを噛み締めつつも、馬場ならではの店の街並みも大切にしていきたい。